

実践

**JSL 児童の学びをつなぐ「学習記録」の実践
—日本語教室と在籍学級の連携を目指して—**

中野裕美子 (すみだ国際センター)・安西由香里 (墨田区立錦糸小学校)・池上摩希子 (早稲田大学)

.....

実践現場の小学校は全校の約45%がJSL児童で、約17%が日本語教室で支援を受けている。2名の加配教員配置があり、区教委所管の「すみだ国際学習センター」が設置されている。また、在籍学級でのJSL教科指導を校内研究テーマとしている。

児童の学びを分断しない連携が求められてはいても、在籍学級と日本語教室では担当者や時間数等が異なり、学習内容や目標の共有が困難な場合が多い。本実践では、学級と日本語教室において、児童が表現し理解する様子を「学習記録」として記述し、担当者間で共有することで、在籍学級と日本語教室の学習を繋ぐことを目指した。

上記目標の達成には、①児童の日本語力の把握と共有、②教科内容に関する協議と指導計画との連動、が求められる。①のためには「個別の指導計画」作成とDLAを、②については、校内研究と連動させて算数科に重点を置いて進めている。そのうえで、加配教員が日本語教室でJSL算数科を指導する際に、日本語指導員が児童の具体的な発言や様子を捉えて「学習記録」を作成する。在籍学級でも、児童が躓くポイントや日本語教室での学習に関わる産出等を記録している。この記録を担当者間で共有して振り返り、次の実践に生かす取り組みとした。また、日本語教室での児童の実態を担当が把握でき、在籍学級で必要な支援に繋げている。

「学習記録」を通して、児童が二つの場での学びを活用していることが確認できた。小集団での日本語学習の様子からは、伝わりにくい概念や用語の一部抽出もでき、また、単元での躓きが未習であるからか日本語の理解の問題かを見極めることもできた。課題としては、日本語の実態に合った教科の選定、教科を日本語で学ぶことで育てたい力を見通しての計画作成等が指摘された。また、授業者の意図に対する児童の反応や身についた力を全て記録できているとは言えず、記述の精緻化と指導計画への反映を目指している。